

明治の漢学者・漢詩人、森槐南の『唐詩選評釈』（1892）は、単なる『唐詩選』の注釈書ではない。『唐詩選』は中国・明代、古文辞学を提唱した李攀龍の編撰なのか、同書に李攀龍の古文辞学の主張がうかがえるのか、という漢文学史上の重大な問題が存在しており、『唐詩選評釈』はこの問題を検討した重要な書であることを、江戸末期から明治期にかけて、李攀龍・王世貞・荻生徂徠らの古文辞学を継承した泊園書院との関連性から解き明かした。

さらに、『唐詩選評釈』は、『唐詩選』所収の、音楽と関連する詩歌が、宋代に隆盛する「詞」の胚胎となっていることを指摘しており、これは、森槐南が「詞」文学史の記述に1892年には強い関心を抱いていたことを証明するものである。槐南は後年、東京帝国大学で「詞曲講義」を行い、その講義録は雑誌「詩苑」に掲載されるが、今回の発表では、雑誌「詩苑」の「詞曲講義」と、『唐詩選評釈』との関係を手がかりに、明治期の「詞」文学の受容の一端を明らかにした。（主幹／長谷部剛）